



あんげろす第62号

著者	永野 茂洋, 植木 献, 坂口 緑, 加藤 拓未
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニュースレター
巻	62
発行年	2013-12-01
その他のタイトル	明治学院大学キリスト教研究所ニュースレター
URL	http://hdl.handle.net/10723/1705

あんげろす

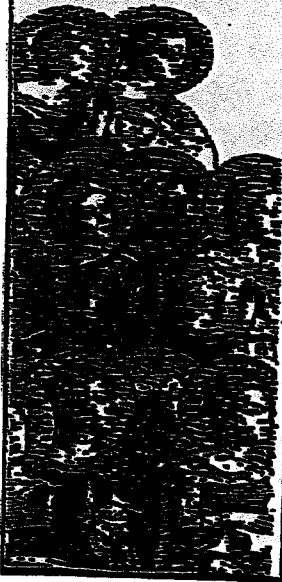
乗松の柿の木

教養教育センター 永野茂洋

この夏、韓国の水原市を訪れる機会を得た。水原は明治学院出身の乗松雅休（のりまつまさやす）が1896年（明治29年）から15年間伝道した地である。今はその跡に信徒席20～30の小さな韓国同信会水原教会が建っている。中庭に柿の木が一本枝を伸ばしていた。乗松が植えたものだという。乗松は農民と同じ家に住み、同じ物を食べ、同じ服を着て、朝鮮語で伝道した。この柿もほとんど人にあげていたという。金太熙牧師撰書による碑文は、「数十年の風霜、心肺疼痛し、皮骨凍飢し、手足病敗す。しかるに動静ただ主に頼り、苦に甘んずるの楽しみを改めず」と彼の姿を伝えている。多くを語らず、ただ柿の木にいい色の実がなるのを毎年楽しみに眺めていたのだろう。「明治学院研究」で一度乗松を取りあげてもいいのではないかと思う。

第62号

2013年12月



植木 献

着任以来、主に怠惰を理由としてキリスト教研究所と最低限のかかわりしか持ってこなかった私が主任となり、投稿を断念した明治学院 150 周年記念出版『境界を越えるキリスト教』について感想を述べなければならなくなった。こんな窮地に陥ったのは、神の悪戯としかいいようがない。めでたいことは好きでも面倒くさいことは嫌いな私は、自らの境遇に悪態をつきつつ、出来ることなら触れたくなかった同書を紐解いてみると、想定外の深い洞察を突きつけられ反省を迫られた。

最も強く実感したのは、必ずしも自らが思い描いていた人生のビジョンどおりに物事が進まないことを通して、神の計画は進められていくのではないかということだった。

冒頭の講演録に綴られる創立者たちの生涯もそうである。ヘボン夫妻もタイや中国での伝道の希望が叶えられていれば、日本に来ることはなかっただろう。また日本に到着した際にもあくまで主目的は日本人に福音を述べ伝えることであって、医療も聖書翻訳も語学教育もあくまでその手段に過ぎなかったはずである。けれども今日残されたものは、キリスト教国日本ではなく、ヘボン式ローマ字や明治学院という学校である。人生のビジョンから見れば、今あるものは失敗といわざるを得ない。

また深谷美枝「病院チャプレンの実践研究」から見た『キリスト教と日本社会』の結論も考えさせられた。「キリスト教が日本社会に現に提供しているもの、(中略)聖職者であるチャプレンを通してのものが『伝道』ではなく『ケア』である」との指摘は、看過で

きない重みを持つ。同論によれば、この「ケア」はキリスト教において、「ディアコニア(社会奉仕)」であって、宣教の一要素として捉えられてはいるものの、伝道を本来の役割として召命された牧師であるチャプレンが「機能不全」に陥る危険性をもはらむからである(p.287)。日本において最もキリスト教が受け入れられている教育と医療の現場には、最も福音の本質を変質させる危機があることを受けとめる必要があるだろう。ここにおいても私はやはり思い通りにならないある種の「失敗」を意識することになった。

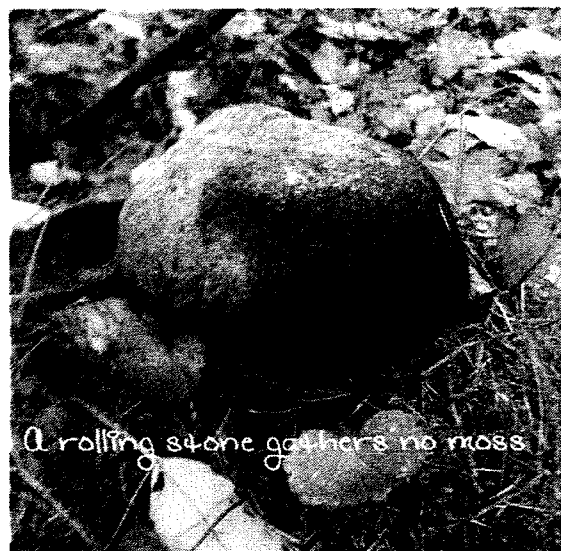
キリスト教の変質を日本固有の課題として捉えるとき、遠藤周作の『沈黙』や、また遠藤興一による「天皇制慈恵主義」の問題提起から明治学院も自由ではないと思わされる。明治学院 150 年の歴史も日本のキリスト教変質の歴史であるかもしれないからだ。めでたいとばかりは言っていられない緊張感がある。

けれども思い描くビジョンどおりにはならないのは、日本ばかりではない。キリスト教の歴史そのものも同様ではないか。元来古典学者であったカルヴァンは、安住の地を求めてパリを脱出し、たまたま立ち寄ったジュネーヴで請われて市の宗教改革を行った。これが「資本主義的近代西洋世界が築かれていくための大きな力」(p.125)になったのは有名な話だ。けれども、一個人の人生として考えると、目指していたところとは異なる道に導かれる感慨深い事例である。カルヴァンがジュネーヴに立ち寄らなければ、ヘボンが日本に立ち寄ることもなかった。そこには、論理的な必然性よりも、複雑な流れに翻弄されるドラマの主人公の姿を見いだす方がたやすい。

さらに「オリゲネスにおける戦争倫理学」を読めば、今日「正戦論」として毛嫌いされ

る論理の背後に生々しい現実と格闘する「宗教的生」(p.84)の緊張感を感じるだろう。ここには、正戦論は本来平和主義のキリスト教が殺人を肯定するようになったなれの果て、といった墮落史観を一蹴する生の複雑さを見て取れる。

以上の取り上げた事柄に「発展」とか「墮落」といったレッテルを貼るのは容易である。容易だが適切ではないだろう。この学院の歩みも、研究所のあり方も、更に言えばキリスト教の営みも、懸命に西を目指しながら複雑な海流の中で東に流されていく船のようなものかもしれないからだ。それならば「発展」を誇ったり、「墮落」を嘆くよりは、翻弄され転げ回る自らをユーモラスなものとして、笑う方がよいと思うのである。それが神の計画であることを信じて。



うえき・けん (教養教育センター准教授、主任)

「いずみ寮」の思い出

坂口 緑

東京都と埼玉県の県境に位置する練馬区大泉学園町のはずれに、「いずみ寮」という施設がある。大きな木々に囲まれた低層の建物に、薔薇の咲く庭。今ではしっかり施錠された門と塀が取り囲むこの土地も、以前は生け垣があるだけの簡素な広場だった。そこは子どもだった頃の私にとって、恰好の遊び場だった。子ども礼拝が終わったあとの時間、教会のそばの児童公園での遊びに飽きると、私たちは自転車をとばし、好んでこの場所へと移動した。兄弟や友人たちと缶蹴りをし、どんぐりを拾った。秋のバザーの準備では、寄付された古着を仕分ける手伝いをさせられ、良いものがあったからと呼び出されては大きめのコートを試着させられた。大量のケーキを焼くためにパウンドケーキの型紙を何十枚も切ったり、セメント袋で届く小麦粉をせっせと小分けしたりした。小学生にもなると、バザーの店番をした。食堂でふるまわれる「茶飯とおでん」の定食が楽しみだった。

「いずみ寮」は、売春防止法が成立した1958(昭和33)年に開所した婦人保護施設である。法律の成立とともに行く場所を失った女性たちを保護する場所として、深津文雄牧師がスタートさせた。当初から、ディアコニッセの奉仕女たちが、「いずみ寮」と礼拝を守ってきた。住む場所を得て、やっと人は借金や暴力の問題に向き合えるようになる。知的障害や精神障害が認められる人も少なくない。地域の病院、不動産屋、民生委員、ソーシャルワーカーが連携し、彼女たちの自立を支援する。2007年には牧師館が改装され、退所後の社会復帰訓練に特化した「ステップハウス」が誕生している。

私が子ども時代に通っていたのは、この「いずみ寮」の礼拝から始まったという小さな教会だった。寮生も毎週、礼拝に出席した。スポーツ刈りの中年女性、いつもとうとうしている大柄の女性、真っ赤なマニキュアがとれかけている長い爪の女性、まっ白い肌の若い女性。冬なのに薄い生地ドレス一枚で外を歩く人や、いつ会っても体育着のようなジャージしか着ていない人もいた。彼女たちは一様に子どもに優しくした。子どもにとっても、彼女たちは近い存在だった。赤ちゃんがやってくると、誰もが代わる代わるだっこをし、それはそれは可愛がった。自分の子どもと引き離されて暮らしている寮生も少なくないと知ったのは、ずいぶん後になってからのことだった。

「いずみ寮」は多様な女性が集まる場だ。東京郊外の住宅地で、男性が町に出て働いている昼間や家族が寝静まった夜間、牧師婦人や職員、奉仕女、教会員たちが数々の問題に知恵を出し合い対処する。門限を過ぎても帰ってこない寮生がいれば、手分けをして見つかるまで探し出す。引きこもる寮生を訪問する。寮生が引き起こすいさかいやトラブルの知らせを受けては、近隣のお店に謝罪に出向く。仕事を得て退所した卒寮生が、毎日きちんと出勤するかどうかを見守る。そして、春のイースターや冬のクリスマスをみんなで祝い、苦しみと喜びを分かち合う。

社会学を学ぶようになり、世の中の仕組みを理解できるようになってからあらためて怒りを覚えるのは、売買春や家庭内暴力の問題に対処する支援の枠組みが、50年前とさほど変わっていないという事実である。暴力の犠牲になる女性がいっこうに減らないことにも、少数の専門家と多数のボランティアでかろうじて運営されている施設が事実上の命綱となっている日本の状況にも絶望す

る。けれども、ここに連なる人々が重ねてきた毎日の業を覚え、思い直す。知恵を出し合い、問題に向き合い、女性たちの生活を支えるために、与えられたものを分け合う。必要な支援を必要な人に届ける。生活を少しでも前に進めようと実際に力を発揮しているのは、ここに集まる多様な背景をもつ女性たち自身なのである。このようにして、「いずみ寮」が支援してきた女性は、半世紀のうちに延べ1万人を超えている。



「1974年頃、大泉学園の自宅にて」

さかぐち・みどり（社会学部教授、所員）

レクチャーコンサート

「18 世紀ドイツの教会音楽——バッハ親子とホミリウス」

加藤拓未

2014 年 2 月 17 日 (月) に白金校舎礼拝堂 (チャペル) で、レクチャーコンサート「18 世紀ドイツの教会音楽——バッハ親子とホミリウス」(キリスト教研究所主催) を開催いたします。

「2014 年」はバッハの次男カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ(1714~88)と、バッハの弟子ゴットフリート・アウグスト・ホミリウス(1714~85)の生誕 300 年にあたります。今回は、このふたりの音楽家と、ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685~1750)を加えた三者の教会音楽を、その創作背景や、音楽の特徴と相違を解説しながら、実際に演奏を交えて紹介したいと思います。

出演者をご紹介しますと、まずドイツのハンブルクからテノール歌手クヌート・ショホ(Knut Schoch)さんをお招きいたします。そして、ソプラノ歌手の鈴木美登里さん、オルガン伴奏に安積道也さんが登場してください。講師は筆者が担当いたします。

クヌート・ショホさんは、現在、ハンブルクを中心とする北ドイツで、教会音楽の第一人者として揺るぎない名声を誇っています。私がショホさんの歌声にはじめて触れたのは、実は今から 15 年前の 1998 年 8 月ことです。当時、本学文学部芸術学科の 4 年生だった私は、卒業論文の材料集めにドイツへ渡り、そのついでに南ドイツの小さな田舎町、シュヴェビッシュ・グミュントで開催されていた「ヨーロッパ教会音楽祭」を訪れました。この音楽祭で、ショホさんはヘンデルのオラトリオ《エジプトのイスラエル人》の独唱を歌

っていましたが、その圧倒的な実力で会場の聴衆を唸らせていました。細身で、背が高く、ブロンドの髪を短くまとめた彼の歌う姿は、まさに「貴公子」そのもので、もちろん終演後には、少なからず若い女性ファンに囲まれていました。

そのときは、特に面識はつくれなかったのですが、昨年、偶然に知り合う機会を得て、意気投合。親日家のショホさんは、ドイツ伝統の教会音楽の素晴らしさを、一人でも多くの日本の方に知ってもらいたいというお考えで、今回のレクチャーコンサートの企画にも大いに乗り気です。彼の歌の特徴は、やわらかい美声に乗って響きわたる、歌詞の明瞭さにあります。けっして派手な歌唱ではありませんが、実に言葉がクリアーに聴衆の耳に届きます。歌をうたっているはずなのに、旋律よりも、まるで歌詞の方が先に聴こえてくるようなのです。まさにこれこそが、ドイツ語の言葉の美しさと音楽が融合した、真の姿と言えるでしょう。このショホさんの円熟した歌唱芸術を、みなさんにご紹介することも、今回のレクチャーコンサートの重要な目的のひとつです。

ソプラノの鈴木美登里さんは、昨年ライブツィヒ市より「バッハ・メダル」を授与された鈴木雅明氏率いる「バッハ・コレギウム・ジャパン」(BCJ)のソリストとして、ご存知の方も多いのではないのでしょうか。BCJのヘンデル《メサイア》盤や、バッハ・カンタータ全集などのCDで独唱を担当されているほか、近年は、特に 16 世紀の芸術歌曲であるマドリガーレの研究に力を入れ、声楽アンサンブル「ラ・フォンテヴェルデ」を結成し、モンテヴェルディのマドリガーレ全曲演奏に取り組んでいらっしゃいます。鈴木美登里さん曰く、「ショホさんとは、オランダでバッハの《口短調ミサ曲》演奏ツアーで

共演して以来なので、とても楽しみです。」
とのこと。

オルガン伴奏は安積道也さんをお願いしました。安積さんは1996年3月に本学文学部心理学科（現心理学部）を卒業後、音楽の道を志してドイツに渡り、8年におよぶ勉強の末、音楽家のための国家試験で最上級の「ドイツ国家演奏家資格A級」を取得されました。現地では指揮者として100名を超える合唱団員やオーケストラ奏者を相手に、ドイツ語で矢継ぎ早に指示を出し、演奏を統括していたという「つわもの」で、現在は西南学院音楽主事として、福岡を中心に指揮者・オルガン奏者として活躍されています。

ショホさん、鈴木さん、安積さんと私の4人で作りあげる今回のレクチャーコンサート——きっと充実したものになるのではないかと思います。



北ドイツ・カルテンキルヒェの教会コンサートで歌うクヌート・ショホ氏（2013年9月3日）

かとう・たくみ（明治学院大学歴史資料館研究調査員、協力研究員）

雑録

植木 献

この雑録は主任が担当することになっている。また、雑録だから何を書いてもいいらしい。けれども、初めて主任を経験した身としてはまだそんなに好き勝手も出来ないから、やはり他の投稿文と何か関係づけて書かなければという気持ちになる。

無理を承知でこじつけるならば、今回の寄稿には「神にのみ栄光を帰す」人々を扱ったという共通点を見いだせる。J. S. バッハは自分のスコアにこの言葉を記していたというし、深津牧師の「いずみ寮」でははたらきも当然ながら自らを誇るためではなかった。韓国で辛酸を味わいながら伝道した乗松の思いも同様だろう。ヘボン夫妻も自分たちの名前が記憶されることよりも主イエスの御名が賛美されることを望んだのは間違いない。

これらのあえて自らの名を残そうとしなかった人々のはたらきを追体験する。そして今自分が立つところから彼らの目指した先をもう一度見据える、ということは、プロテスタント的な営みであるし、また幾度となくキリスト教の歴史の中で繰り返されてきたことに相違ない。

「150周年」という節目の年にやるべきことは多くあるが、「神にのみ栄光を帰す」ための追体験にも焦点を当てられたらと思う。

* * *

今年度秋学期より主任を担当することになりました。どうぞよろしく申し上げます。

研究所活動（8月から12月）

所員会議

第5回

開催日時：2013年10月23日（水）14：00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

第6回

開催日時：2013年11月27日（水）14：00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

所長選挙

開催日時：2013年11月27日（水）14：00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

査読委員会

開催日時：2013年9月25日（水）14：30-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

フィールドワーク

白金文学研究プロジェクト

島崎藤村とゆかりの文学散歩

開催日：2013年8月3日（土）

引率者：村上文昭（協力研究員）

公開研究会

キリスト教主義教育研究プロジェクト

開催日時：2013年9月15日（日）13：00-

開催場所：横浜キャンパス宗教部集会室

「キリスト教と平和学—沖縄の現状から」

発表者：池尾靖志（客員研究員）

戦後の宣教師研究プロジェクト

開催日時：2013年10月17日（木）13：00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

「明治学院における戦後の宣教師たち」

発表者：陶山義雄先生（東洋英和女学院大学名誉教授）

公開講演会

開催日時：2013年10月10日（木）15：30-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

「Institute of Shino-Christian Studies:

Promoter of the Movement of

Shino-Christian Theology in Mainland

China（漢語基督教文化研究所—中国における漢語キリスト教神学の担い手として）」

発表者：ダニエル・ヤン（漢語基督教文化研究所所長）

通訳：島田由紀（協力研究員）

ヘボン塾校友講座

第1回（賀川豊彦の実践と近代日本）

開催日時：2013年9月28日（土）3限

開催場所：白金校舎2号館2201教室

講師：橋本茂（本学名誉教授、名誉所員）

第2回（賀川豊彦—カルヴァン資本主義を超えて—）

開催日時：2013年10月5日（土）3限

開催場所：白金校舎本館10階大会議場

講師：清澤達夫（本学非常勤講師、協力研究員）

第3回（島崎藤村—1906年の緑葉—）

講師：嶋田彩司（教養教育センター教授、所員）

開催日時：2013年10月12日（土）3限

開催場所：白金校舎本館10階大会議場

第4回（島崎藤村—1906年の緑葉—）

開催日時：2013年10月19日（土）3限

開催場所：白金校舎2号館2201教室

講師：嶋田彩司（教養教育センター教授、所員）

第5回（植村正久—聖書・賛美歌と日本古典文学—）

開催日時：2013年10月26日（土）3限

開催場所：白金校舎2号館2201教室

講師：吉馴明子（本学非常勤講師、協力研究員）

※台風のため中止となり、11月30日に延期

となりました。

第6回(植村正久—文明史観と日清・日露戦争—)

開催日時:2013年11月9日(土)3限

開催場所:白金校舎2号館2201教室

講師:吉馴明子(本学非常勤講師、協力研究員)

第7回(戦時下の明治学院)

開催日時:2013年11月16日(土)3限

開催場所:白金校舎2号館2201教室

講師:中山弘正(本学名誉教授、名誉所員)

コメンテーター:大西晴樹(明治学院学院長、名誉所員)

コメンテーター:竹尾茂樹(国際学部教授)

・『福音と世界』No.11、新教出版社、2013。

・『福音と世界』No.12、新教出版社、2013。

・『説教黙想アレテイア』No.81、日本キリスト教団出版局、2013。

・『説教黙想アレテイア』No.82、日本キリスト教団出版局、2013。

・『命のビザを繋いだ男 小辻節三とユダヤ難民』山田純大著、NHK出版、2013。

明治学院150周年記念シンポジウム

「明治学院大学とキリスト教教育」

開催日時:2013年11月23日(土)15:00-

開催場所:白金校舎本館1201教室

司会:司馬純詩(国際学部教授、所長)

発題1「キリスト教大学の理念とキリスト教」

発表者:加山久夫(本学名誉教授、名誉所員)

発題2「明治学院大学のキリスト教教育」

発表者:永野茂洋(教養教育センター教授、所員)

コメンテーター:橋本茂(本学名誉教授、名誉所員)

150周年記念出版『境界を超えるキリスト教』

(教文館)出版祝賀会

開催日時:2013年11月23日(土)17:00-

開催場所:白金校舎本館10階大会議場

新着図書(4月から7月)

・『福音と世界』No.7、新教出版社、2013。

・『福音と世界』No.8、新教出版社、2013。

・『福音と世界』No.9、新教出版社、2013。

・『福音と世界』No.10、新教出版社、2013。

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第62号

2013年12月1日 発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩